日本近代文学大系　33

有島武郎集

解説　瀬沼茂樹
注釈　山田昭夫

角川書店

瀬沼茂樹（せぬましげき）

明治37年（1904）東京都に生まれる。昭和4年（1929）東京商科大学卒業。日本近代文学専攻。現在大正大学教授。主著『現代文学』（昭8，木星社書院），『島崎藤村』（昭24，世界評論社），『近代日本文学のなりたち』（昭26，河出書房），『島崎藤村—その生涯と文学』（昭28，塙書房），『近代日本の作家と作品』（昭30，要書房），『評伝島崎藤村』（昭34，実業之日本社），『近代日本の文学』（昭34，社会思想社），『現代文学の条件』（昭35，河出書房），『夏目漱石』（昭37，東京大学出版会），『近代日本文学の構造』（昭38，桜英社），『戦後文学の動向』（昭41，明治書院）

山田昭夫（やまだあきお）

昭和3年（1926）札幌市に生まれる。昭和26年（1951）北海道大学法文学部国文学科卒業。昭和28年（1953）東京大学文学部国文学科大学院修了。日本近代文学専攻。現在藤女子大学助教授。著書『有島武郎』（昭41，明治書院），共著『物語・北海道文学盛衰史』（昭42，河出書房），編著『本庄陸男遺稿集』（昭39，北書房）

日本近代文学大系　全60巻　　第33巻　有島武郎集

昭和45年3月10日　初版発行
昭和61年6月30日　4版発行

注釈者　山田昭夫
発行者　角川春樹
印刷者　中内康児
製本者　鈴木俊一

発行所　株式会社　角川書店（かどかわしょてん）
東京都千代田区富士見2—13—3
電話　営業部(03)238—8521
編集部(03)238—8451
郵便番号102　振替東京3-195208

落丁・乱丁本はお取替えいたします　　暁印刷・鈴木製本

ISBN4-04-572033-2　C0393

目

次

凡例　五
有島武郎集解説　瀬沼茂樹　八
有島武郎集注釈　山田昭夫
カインの末裔　四三
生れ出づる悩み　九一
星座　一六三
惜みなく愛は奪ふ　二二五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

宣言一つ　四四五
補注　四五三
参考文献　四九五
年譜　五〇四
関係地図　五一六
注釈者あとがき　五一八

凡　例

一、本書には、有島武郎の著作のうち、小説「カインの末裔」「生れ出づる悩み」「星座」の全文、および評論「惜みなく愛は奪ふ」（大正九年六月発表の定稿）「宣言一つ」の全文を収めた。

一、本書の本文としては、新潮社版『有島武郎全集』を底本とし、いずれも初出紙誌との校合を行なうとともに、それぞれ『有島武郎著作集』第三、六、一一、一四、一五輯と照合してその異同を注釈で示した。ただし、『有島武郎全集』が著作集を底本としているので、一部の組み違いと誤植のほか意味上の大きな相違はあまりなく、その組み違いと誤植を正常に改めた。

一、本文の表記は、かなづかい・漢字・段落・句読点・符号の用いかたなど、すべて右の底本に従った。またルビについても、底本に忠実に従い、読者の便宜のために底本にないルビを新たに付する際は、（　）で囲んで、それが注釈者の判断によってふられたルビであることを示した。なお、この場合のルビの表記も、本文に従い旧かなづかいによった。

一、注釈は、見開き二ページごとに本文の部分に一、二、三……の番号を付し、それぞれについての頭注を各ページ上部に収めた。また頭注で十分に注しえないものについては→印で示し、補注として巻末で詳述した。この補注の番号は、一巻通しとした。

一、注釈の表記は、新字新かなづかいにより、難読漢字の読みは（　）にいれて、その語の下においた。ただし、引用文のかなづかいは原文通りとした。

一、注釈内容は、先行研究の成果をとりいれつつ、作品の主題、文体、語法、発想、構成、人物の心理、風俗史的事実に関わる事項注、ならびに作者の経験的事実などに重点をおき、必要最小限の語釈をこれに加えた。また原則として、頭注は、表現に密着しながら作品を客観的に鑑賞していくことを旨とし、補注では、典拠・素材の考証、作品の特質や背景、成立事情、先行研究の紹介と検討、同時代評などを含めて、さらに作品を深く読解していくための作品論的展開を

主とした。

一、注釈中の数字は、引用文を除き、「十二」「二百三」とはせず、「一二」「二〇三」のように記した。ただし年号などを（　）の中にいれる場合は、洋数字により（明34・1）（大12・6）のように示した。なおその際、明治以降の年号に限って、それぞれ、明、大、昭と略記した。

一、単行本は『　』、新聞・雑誌、および作品名・論文名などは「　」で示した。

一、巻頭のカラー口絵は、『有島武郎滞欧画帖』（日本近代文学館）に拠った。

一、巻末に参考文献、年譜および関係地図を掲げ、鑑賞・研究の利用に供した。

解説

有島武郎集解説

瀬沼茂樹

はじめに

有島武郎は中年から文学者として立ち、その文学的境涯はきわめて短く、七か年たらずで終ったけれども、鬱積した情熱を傾けて、充実した成果をあげた。漱石亡き後の後継者をもって目されたことがあり、一代の流行作家に数えられたこともあるから、その成果の一斑は察せられよう。もちろん、人気のようなものはもともと浮動的なものであり、軽薄を免れないのだから、武郎の流行もまたその域を出ないということも事実である。しかし日本自然主義とその末流がうちたてた文学観念の外に出て、むしろ文壇圏外に生きることで、人気や流行を広汎な読者の間に克ち得たとも考えられるであろう。

武郎は、文壇的には「甘つたれた西洋の文学趣味の現れ」（正宗白鳥）とか、「西洋の名曲を蓄音機できくやうな感がある」（芥川龍之介）とかいうように、玄人筋からの悪評を免れなかった。この西洋的性格こそは、逆に日本の文学的伝統を超えて、世界文学への通路を明かにし、大正文学の一帰結としての私小説的性格とは異なって、むしろ夏目漱石、徳冨蘆花、あるいは晩年の森鷗外と軌を一つにして、むしろ近代文学の核となる本質的なものにかかわり、一般の人気や流行がそこに由来していたとみられるから、読者の嗜好の油断のならぬことをあらわしていよう。

あの不幸な人妻との心中事件のために、不惑をすぎること五年、武郎は四五歳の若さでみずからの生命を絶った。彼の同胞はみな八〇歳前後の長寿をたのしんでいるから、天命を完うしたとしたら、武郎はどういう運命を閲するか、昭和の動乱

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を思うときに、にわかに逆睹しがたいものがあろう。武郎の文学がそこでとうてい無事にすみそうにもないと考えられるし、彼の不幸な最期もそこに深い動機を秘めているとも思われるからである。だからこそ、武郎の文学は興味のある問題をはらんでいるともいえる。とにかく、人妻との不名誉な情死は、近視眼的な道学者の顰蹙を買って、教科書から抹殺されもしたけれども、世人は過渡期に生きる真摯な知識人の痛ましい悲劇として、愛惜の念を絶たず、著作集は版を重ねるし、全集はみたび装を新たにして出版されるまでに、読者に歓迎せられた。

戦後も、彼の代表作というべき長篇「或る女」や「星座」、短篇「カインの末裔」などは、日本の近代リアリズム文学の中の最高峰の一つと推賞せられ、近代日本文学史に独自の場所を占め、たえず愛読されている。もっとも、徳冨蘆花などとともに、全集が棚ざらしになり、全業績の検討を怠るかにみられた一時期もないわけではない。複雑な多面性のために、彼の本質の把握がむつかしかったり、戦後の性急な喧騒に適しなかったためかもしれぬ。このためにかえって新鮮な眼で彼の文学をみなおす機縁も生まれ、その文学が全円性において検討され、その思想が多様に問題性においてとりだされ、彼の文学のなかに滋味の多い将来の可能性がつかみだされようとしている。武郎の文学が、近代日本の知識人にとって核心的な思想の問題をふくんでいるとすれば、きわめて当然なことであろう。

有島武郎は白樺派の一員であるがために、今日、再評価に役だっているといった幸運もあれば、また逆に白樺派の文学が武郎を擁しているがために、あらためて顧られるといったような時期が、将来こないとも限らないのである。しかも、武郎の文学が単に市民文学にとどまらず、社会に誠実であったがために苦悩し、常に将来に働きかけていたところに、むしろ市民文学を越えて次代を形づくる大きな意義をふくむはずであり、そこに彼独自の趣があったことを忘れることはできまい。

幼年のころ

有島武郎は、薩摩の英雄西郷隆盛の亡んだ西南戦役の翌年、明治一一年三月四日、東京の小石川水道町五二番地（現、文京区水道一丁目一二番七号）に生まれた。昔の江戸川べりで、大曲といわれるところ、安藤坂の登口を左折したあたりにあたっている。当時、父の有島武は大蔵省の権少書記官であった。父武三七歳、母幸子二五歳の長男であった。父母は、この時

代の常識からいえば、晩婚であるが、それもそのはず、両人共初婚ではなく、再婚、それも三度目であったので、この長男の出生は大きな喜びであった。

武・幸子の間には、武郎を頭に、やがて五男二女が生まれ、十数年の間に、七人の子持になっているから、子宝に恵まれたといえよう。しかも、武郎を初め、次男の壬生馬（明治一五年生）、四男の英夫（明治二一年生）の三人までが芸術家となった。壬生馬は、小説家で洋画家である有島生馬、英夫は母の家を継いで山内姓を名のり、小説家の里見弴である。共に白樺派から出たことになる。かように、兄弟が三人までも芸術家になった父母の血は何かとさぐってみても、たいして満足すべき答は出てこない。逆に有島三兄弟からみて、父祖の血に芸術家的素質をみいだし、兄弟の出生によって実証となったというべきであろう。

武郎兄弟の両親は、いずれも維新の転換期に処して、貧困と苦渋とをなめ、苦労して育った。有島氏は、九州の薩摩藩の島津氏の一支族北郷氏の平佐郷の郷士、つまり下級武士であり、島津氏からいえば、陪臣にあたっている。しかも祖父の有島宇兵衛は北郷氏のお家騒動「平佐崩れ」にまきこまれて流罪に処せられた。つまり父武は、「平佐崩れ」の一人息子として、幼年時代より貧困にさらされ、自己の才覚によって、身をおこさなければならなかったことは、たやすく察せられよう。幸いに、明治維新にさいして、薩長政府といわれる明治政府に仕官し、時流にのって出世街道をたどり、大蔵省の国債局長にまでのぼり、次いで実業界に身を投じ、麹町の下六番町に広大な旗本屋敷に住む成功者となった。早くから洋学を学んだ才覚にもよるが、また閥族の引立てに負うことが多いのは否めない。

母幸子は山内氏、東北の南部藩の江戸表留守居役の家の出である。留守居役は江戸在住の外交官として社交に当たる高級武士であり、必ずしも南部出身者に限ってはいない。祖母静子が九州の久留米藩の出身であるから、南方の血が濃いのである。母幸子は幼くして祖父を失い、維新の変動には一度は朝敵として盛岡で戦塵をあびた。それゆえに、弟の山内英郎とともに、祖母を助けて、流離貧困のうちに一家の再建をはからねばならず、多くの苦労を嘗めた。再度の結婚の失敗もまたこの家の受難に関係をしているが、幸子は武と結婚して、初めて安堵の胸をなでおろしたというべきであろう。

両親がともに封建武士の出身であったから、子女の教育は、とうぜん儒教的倫理をもって、きびしく躾をするところがあった。ことに武郎は長男で、「家」の相続者であったから、他の子供たちよりも期待されるところが大きく、それだけ文武に

わたって厳格にきたえられた。しかも父のなかにみられる狂熱家的な性情は、母の性質をうけて知性的だといわれる武郎の、芸術家的素質にもつらなっているかに、考えられる。弟の生馬や弥は、この兄の武郎があって、各自の芸術家的才能を、思いのままにのばすことができた、ともみられる。家系的には、母方の祖母山内静子の篤い宗教心が注目される。この祖母は早く夫を失い、五人の子女を得ながらも、すべて先だたれ、武郎の母幸子ひとりを残すだけになった。このために、自力信仰の御岳教から他力本願の一向宗に宗旨をあらためたりしたけれども、宗教心が深く、武郎の宗教的教育には力をつくしたといえよう。「一心」とか「克己」とかいう宗教的な徳目や禁欲主義的な徳目を教えて、誠実熱心な武郎の性向をみちびき、後のキリスト教入信につらなり、深い煩悶ともつながるところがある。

父武は武郎の誕生後まもなく関税改訂のために欧米に使し、ロンドンで大蔵大輔松方正義と出あった。このために、帰朝以来、関税諸規則や税目調査の仕事にあたっていた。明治一五年六月、関税局長心得兼横浜税関長となって、横浜に移り、月岡町の税関官舎に住まった。武郎は数え年五歳で、明治の文明開化の最尖端、「開港場」の横浜に育った。

武郎はすでに東京で東京女子師範学校（今日のお茶の水女子大）の附属幼稚園に通っていたが、横浜に移ると、二歳年下の妹の愛子とともに、ギュリック夫妻のもとに、一日を過ごすようになった。武は国家主義的な信念の持主であるからこそ、かえって西洋文明による採長補短、つまり日本の近代化の必要をさとり、幼少のころから子供たちに外国語を習熟させ、欧米教育をうけさせる下準備にしようとしたのである。そして数え年七歳になると、ミッション・スクールのブリテン女学校（男子部は後に横浜英和学校と呼んだ）に入学させた。この学校で起こったエピソオドが、後年、童話「一房の葡萄」となった。友人の西洋絵具を盗んだことがわかり、子供心にも恥じて、心を痛めていたとき、若い女教師に一房の葡萄をめぐまれて、なぐさめられたという話である。今日、この童話を読むものは明治初年のミッション・スクールの様子がわかる。

武郎は、すこし誇張していえば、日本語を正式に学ぶ前に、英語を学んだというべきであり、英米流の自由教育に育てられるが、キリスト教倫理による躾をうけたとみられる。ミッション・スクールに学んだ以上、キャテキズムを教えられたり、旧約聖書の話をきかされたりしたのは、当然である。彼は札幌に学ぶ前から、すでにキリスト教にふれ、日曜学校にも通っていたことに注意すべきである。ここに彼の思考の知性的な型ともみられる原型がつくられていたといえるのである。

しかし、他方において儒教的倫理によって国家主義的な信念をいだいていた両親は、欧米流の自由教育とはまったく背反

する、厳格な武士的な家庭教育をほどこした。一方で、欧米流の自由教育をうけさせていたからこそ、片方で、かえっていっそう厳格な武家の躾を身につけさせようとはかったといえる。文武両道にわたる武家教育である。大学、論語の素読といった漢学教育が文であれば、剣法、弓法、馬術は武である。薩摩藩には示現流の立木打という、有名な荒修業、気魄のこもった、激しい剣法をもっているが、骨骼のかたまらぬ少年には苛酷なくらいに、つらいものである。おかげで、剣法、弓法、馬術はかなりにすすんだ。こんな正式な訓練ばかりではなく、きびしい体罰を加えられもした。私たちが子供のころに叱られるとき、よく「お灸をすえますよ」と、親におどされることがあるが、この灸罰や禁錮もまた珍しいことではなかったようである。

武郎は、自由な人間教育と非人間的なスパルタ教育という矛盾した躾を一身にうけて、どうなったか。みずから「性格がいちけた」といっているように、身心に暗い傷痕をのこしたことになるだろう。ここから父を怖れ、母方の祖母に親しむような性向をつくりだしたようである。これは、躾け方というよりも、むしろ根本方針の矛盾の方が、大きかったのかもしれない。後年の二元性の悩みは、そのことを、証明するようでもある。

数え年一〇歳の時、日本語を学び、学習院に入るために、古谷伝のひらいた私塾自牧学舎に入った。ここで初等科三年までの課程をすませたところで、短時日の間、日本語の学習をして、東京の特権階級の学校へ転校させられることになった。新興官僚としての両親の意図はとにかく、彼にとっては一八〇度の転換であり、むしろ惨酷で、恣意なものであると、評される点がある。とにかく、「極端な変化」のふるいにかけられて、彼の心身は大きくゆすぶられてゆくのである。

少年時代

武郎は明治二〇年一〇月に学習院予備科第三級乙組に入った。

学習院は華族学校で、当時神田錦町にあった。前年の火事で焼けた仮校舎である。予備科は小学科で、六級に分かれ、三級は小学四年にあたっている（数字が小さいほど、上級である）。家が横浜にあるから、幼年舎と呼ばれる寄宿舎に入った。女性のいない、男性だけの寄宿舎では、昔ながらの「男色」がおこなわれていた。美少年の武郎は、上級生から稚児あつかい

にされ、早くも不純な性的圧迫を経験した。両親は高級官僚に出世していたために、貴族趣味から学習院を選んだのであるが、そこにはリゴリズムが生んだ頽廃がみられた。彼は、この性的経験のために、臆病になったと、みずからその悪影響を語っている。

もちろん、男色は、学習院が華族の子弟に陸海軍の士官となることを勧める——武弁教育とも関係があったろう。すでに薩摩の士風にもみられることである。ただ武郎は、学習院の教育方針の影響を守って、初めは軍人志望であった。横浜に育ったために、軍人といっても、おのずから海軍へのあこがれとなって現われた。単純に少年らしい夢を描いていたと考えても、よさそうである。こういう単純な夢は、数え年一二歳の二月に、一つの事件をきっかけにして、破られた。

明治二二年の紀元節を期して、明治憲法が発布された。ドイツ人のベルツが日記に書いているように、憲法の内容を何一つ知らずに、国民は、この盛儀に酔い痴れているようであった。そういう祝典の日に、時の文部大臣森有礼は式典に参列しようとして、官邸を出た玄関先で、刺客の兇刃に斃された。武郎は、森の暗殺を一つの契機として、海軍志願から農業志望に転じたという。

森有礼は、彼と同じように、薩摩出身のホープと目されていた若い官僚である。彼の生まれる前年の西南戦争には、西郷隆盛が自刃し、彼の生まれた年には、武の西郷と並ぶ、文の大久保利通が紀尾井坂に暗殺されていた。西郷、大久保、森と、薩摩出身の俊秀たちは、文武を問わず、相次いで政治的陰謀の刃に倒れていた。彼はただ臆病な性質と自責するような口吻しかもらしていないが、このときに少年の胸に漠然とした厭世観がめばえ、世間的な功名を疑い、一歩退いて、農業にでも志したとしても無理ではなく、この心的経緯は十分に納得せられるだろう。もちろん、彼が彼なりに、農業にもまた夢をもっていたとしても、おのずから別問題である。

武郎は、予備科時代に、品行方正、学業優秀であったために、当時、予備科に在学中の大正天皇の学友の一人にえらばれ、毎週土曜日に吹上御殿に伺候したことをも、つけ加えておこう。

明治二三年九月に、学習院中等科にすすんだ。学習院は罹災後、神田錦町から麴町三年町に移り、四谷尾張町に変わった。この四谷時代が彼の中等科時代である。父武は明治二四年七月に大蔵省国債局長となって、東京に出ていたが、彼はいぜんとして寄宿舎に起居していた。

武郎の学友には岩倉具張、徳大寺則麿らがあり、後の漢学者塩谷温や、後の医学者「(東大総長)長与又郎、後の海軍少将松平保男らはみな同級生であった。彼は学課では、国漢、歴史、芸術を得意としていた。このころから、石井研堂が海国思想を鼓吹するために編集していた雑誌「小国民」とか、今日の少年文学の元祖となった叢書「少年文学」とかを愛読し、口絵を模写し、作文を書いた。絵画、習字、文章の趣味は、その得意とする学課とともにすでに萌芽を現わし、ようやく頭角をあらわしはじめていた。

彼は中学四年にすすむと、寄宿舎も青年舎に移った。父は、時の大蔵大臣渡辺国武と政治的見解を異にして、持前の癇癪玉を破裂して辞職し、鎌倉材木座の別邸に幽居した。やがて、日清戦争の好況にのって、実業界にのりだした。麹町下六番町の旗本屋敷を買い、近隣を併せて、大邸宅としたのも、このころからである。

学習院は、明治二七年六月の強震に校舎が破損し、寄宿舎をとざし、寄宿舎を教場としてもちいた。彼は祖母の家から通学した後、後の東洋史の権威である白鳥庫吉の牛込矢来町の家塾に、岩倉具張、具幸兄弟や、庫吉の甥八代国次らの塾生と共に起居し、そこから学校に通った。庫吉は明治二三年七月に東大史学科を卒業した青年学徒であり、数え年二六歳で、学習院教授に任ぜられ、結婚した翌年の三一歳で、父兄の懇望のままに家塾をひらいた。彼は白鳥塾に身をあずけ、このころから文学と歴史への志望をやや具体化していった。

日清戦争には戦争画を書き、また武者絵を描いて、弟妹をよろこばせた。また歴史小説を試作して、学友に回覧して、その批評を仰いだりした。

『三日月』(明治二三)を書いて、森田思軒にみとめられて登場していた村上浪六は、そのころ、朝日新聞社にあって、『井筒女之助』『奴の小万』等につづく仁侠小説を書いて、通俗的な声名をはせていた。浪六の戯号ちぬの浦浪六の名を承けて、武郎は由井ヶ浜兵六と名のり、関ヶ原合戦における島津家久、豊久親子の討死の悲劇を「慶長武士」に描いた。あるいは新田義貞に滅ぼされる鎌倉武士の最期を「此孤墳」に描いた。日清戦争を背景として、西南役の勇者の破邪顕正の物語を「斬魔剣」に書いた。いずれも明治二七、八年の習作であり、一七、八歳の少年の試作にすぎなかったけれども、悲劇から歴史小説を構成する骨法は、なかなかに心得たものだといえよう。彼の天性には物語作家としての素質があり、これを大成させるものは、その核となる中心思想の独創的な熟成を待つだけであったといえる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com